

## マックス、シエーラアの訃

萊府にて 長 田 新

フランクフルトの便りによると、シエーラア教授はこの數日前突然長逝したといふことです。大學の講義目錄を見ると、「學說と認識」「政治と道徳」といふ講義の外に、教授が指導する演習は「哲學的人類學の諸問題」「知識の社會學」としてあります。「哲學的人類學の諸問題」は哲學の演習であり「知識の社會學」は社會學の演習であつて、何れも教授が得意とする独自の立脚地に關するものであるといふことは、察するに難くない。而かも教授は此等の表題を徒らに掲げただけで、一回の講義一回の指導もせずに逝つたらしい。逝いた人も逝かれた人も共に無念でなくてはならない。多く

の新聞はこの偉大な哲學者の死を惜んで何れも數千言の讚辭を彼に呈してゐます。例へば「ライプチーガア、ノイエステ、ナハリヒテン」といふやうな地方新聞さへも、「死はマックスシエーラアといふ現代の最も生命ある、最も多面的な獨逸の哲學者をば、突如として奪ひ去つた。豊かな果實多かるべき作業の眞最中、然り、哲學に關心する全世界の人達がわけても期待に満ちて彼れを眺めてゐた際に」といふ口吻を以て、實に約三分の一頁を彼が死に割いてゐる。私は併かし、ミュラアフライエンフェルスが寄せてゐる、五月二十二日の「柏林日々新聞」の記事を通して、此哲學者の訃音を祖國の方へも傳へたい。簡にして要を得た

フライエンフェルスの筆は、たゞシエーラアが死を悼むだけではなくて、ありし日の此の哲人の面影を偲ぶに最も相應はしいものゝ一つであるからさうして凡そ新聞といふやうな、一般の民衆を相手とする刊行物が、一人の哲學者の死を悼んで、斯の度の専門的な内容的な記事を掲げるといふことが、若し我が祖國の人達に、獨逸國民が有つ文化と教養の深さを解する多少のよすがともならばそれはまた私に取つて望外の喜であるといふことをも、こゝに附記したい。

## 二

心臟の疾患で逝いたマックス、シエーラアを以て、獨逸精神生活は、その最も優れた一人の代表者を喪つた。高き階級の一人の學者といふだけでなく、生命あり、且又生命を目醒ます力ある一個の人格は、彼と共に消滅した。彼が死は彼に接近せる者には、思ひがけなく、やつて來た。彼が年

來重い心臟病に罹つてゐたといふこと、彼が僅かに人工的な方法でその身體を精神に従はせてゐたといふことは、人のよく知るところである。ケルンにおける彼が從來の教授の椅子を、フランクフルトのそれと取り替へるやうになつたことは、併し、彼がなほも新たなる、さうして廣々とした眺を眺めやうとする希望を彼に與へた。此希望は然るに今や畫餅に歸してしまつたのである。

シエーラアが生涯は、他の獨逸の學者の場合が何時もさうであるやうに、決して直線的には經過してゐない。彼は深い精神的の苦闘に悩み、その上外部的の苦闘をも避けない人格であつた。彼が著作における數々の矛盾は、苦闘多き彼が本性からのみ解さるべきである。けれども、彼れの著作が特殊の價値を附してゐる現代の諸問題に對する情熱ある生の接觸は、實にその同じ源泉に由來する。倫理や宗教の問題に就て哲學するとき、彼は

他人の生活を觀察するとやうな冷かき一觀察者として哲學しはしない。自己の問題を自ら生活し貫き自ら惱み貫きたればこそ、彼は哲學するのである。

一千八百七十四年八月二十二日、シエーラアはミュンヘンに産聲を擧げた。彼れの言葉は、後年再び此地に歸來するまで、バイエルン調を決して失はなかつた。ミュンヘン、伯林ハイデルベルヒ及び彼がオイケンから學位を得たイエナにおいて彼は學んだ。このイエナにおいて彼は一千九百二年教職を得、一千九百七年にはミュヘンの大學に轉じた。然るに彼は一身上の問題に絡まる經緯から一千九百十年には講師の職を退いた。今や自由作家としての彼は主として伯林に生活し、戦時中は外交上の命を帯びて、和蘭で活動した。平和締結後キヨルン大學の設立を見るに及んで、彼は哲學及び社會學の教授の位置を得、且つ社會科學研

究所長になつた。ケルンを中心に、或は教師として、或は建言者として彼は遠くその活動を四方に展開し、また屢々講演者として伯林にもその姿を表はした。今年初春、彼が死の直前、フランクフルトから彼は招かれた。

シエーラアの思想は強い幾回轉を経験してゐる彼は若き日に一つの組織をしかと作つて、それを組織立てたり改良したりするのに、その生涯を通じて不變に従事するといふやうな哲學者には屬してゐない。人としての彼がさうであつたやうに、流轉と發展の力があり且つ種々なる感激にその胸を開いてゐた彼は、その哲學においても種々なる場面を疾走し、ともすれば會て信じたものをさへ焼き盡さずにはおかないやうな概を示したこともないではない。彼はカント學徒として身を起こしてゐるにも拘はらず、彼自身がカントの立場を越えてゐるといふこと、乃至はフッサアルがあの「論

「理學的研究」において歩める途が、彼れの途でもあるといふことが、フツサアルと相識るに及んで彼に明かになつた頃、彼は既にカントの意味において書かれた。論理學上の一著作を公けにしてゐた。久しく彼は「現象學」に屬してゐた。さうしてフツサアルの「年報」の中には、最も重要な彼れの一二の著作が載つてゐる。そのうち「倫理學における形式主義と實質的價值倫理學」(一千九百十三年及び一千九百十六年)の如きは力作と言つてよい。此期の作に屬するものに、「不満と道德的價值

判斷」(一千九百十二年)及び「現象學と同情論」(一千九百十三年)などがある。小論文は集めて、價値の顛倒に就て」(一千九百十九年)二卷をなしてゐる。

スコラ哲學の争ふべからざる根本原理が蘇生してゐるやうなあの現象學を通して、シエーラアは加特力教主義に接近し、さうしてそのアウトグステ

インに關する研究からは、多くの宗教哲學的な内容の著作が現はれて來た。「人間における永劫なるものに就て」(第一卷一千九百二十一年)は、その最もなるものである。

此等の著作のすべてにおいて、彼は新カント的認識論の斷乎たる拒避の下に、人間精神は、その「直觀的意識 *Schauenden Bewusstsein*」の力を以て實在の本質と本質關聯との明瞭な認識に突き入ることが出來るといふ理を説いてゐる。多くのカント學徒の主觀主義に對立して、シエーラアは、價値論に達するところの一個の客觀主義を説いてゐる倫理的及び宗教的の價値も、彼には心意的主觀の存在、從て欲望や感情に依存せざる客觀的事實である。「本質直觀 *Wesensschau*」において攫まれる此等の價値は、一つの確かな王國を形成する。自己の教説を以て、シエーラアはあらゆる近代の心理主義と自然主義とに對立する。

晩年に至つてシエーラアは、併し、一轉回をなし依て著しくフツサルから遠ざかつた。惟ふに彼は世人が普通認めてゐるほど此思想家に依存するものではない。ニイチエとベルグスの激勵も彼には強く働らいてゐた。而かも晩年における社會學上の活動は經驗的研究に彼を導いた。さうして「知識の形式と社會」(一千九百二十六年)といふ著作において、著しく經驗的研究に接近し、遂に人類の理性形式の絶對的歴史的常恒性の原理を放棄した。

とは言へ、此知識社會學 *Wissenssoziologie* は一面においては哲學人類學の、他面においては一大形而上學の新研究に對する單なる準備でなくてはならない。たゞ此企圖が如何なる程度に成熟したかは、簡單に語ることが出来ない。

シエーラアの精神生活のやうな、變化に富み、關係複雑な精神生活を短かき考察において明かにす

るは殆ど難い。若し夫れ「戦争の天才」(一千九百十六年)に關するあの名著の如き餘業に就ては、たゞそのことを陳べるだけにする。シエーラアが著作は樂しき印象には富んでゐるが、併かし決して軽い讀物とは言ふを得ない。彼れの作品には言はず建築家にでも見るやうな強固な趣はない。けれども彼は曾てその表現を叙情詩的のものとしてその特色を表はした。勿論それは多種多様の彼れの知識を到るところに閃かし、その教説に幾千の關係を響かせようとする彼れの仕方なのだ。屢々彼れの人格の道連れとなつて展開して來るあの論議の情熱は、彼れの著作においても亦彼を誘惑して岐路に導いて行く。それにも拘はらず、若しくは正しくそれゆゑに、彼は現代の最も影響多き哲學者になつた。世人は恐らく彼れの著作において如何なる他の獨逸思想においてよりより速き脉搏を感じ、より生動せる、問題との接觸を感じる

であらう。世人が彼れの教説を科學の永續的財産として維持し得るかどうかは兎も角として、彼は到るところにおいて、獨逸精神生活の一人の最も強き建言者であり、主動者であつた。彼はその獨自的なる、遂に逆説に陥るところまで突進し、その流轉的なる、遂に自己撞着に陥るところまで突進せずには居られぬやうな思想家であつた。彼はまた世の多くの人達のやうに、たゞ正しきを守らうとした人ではなくて、寧ろ眞理を求め求めて、それゆゑに、今迄懐く自己の思想を顧みないだけではなく、進んでそれを放棄するのむも意とせやうな人である。さうして彼れの反對者には屢々矛盾と見える此内の生動性こそは、我等に取つて此思想家を他の誰れにも増して、崇めさせる所以のものと思はれる（一千九百二十八年五月二十日）

マックスシェーラー教授は本月十九日に急病にて死去されました。ハイデガー教授はそのために二十一日に大學にての平素の講義の時間最初の十五分を割きて、氏の爲に吊ひの講演をされた。氏の訃はハイデガー教授にとりても精神的には餘程の痛苦でありしと見え、この日は特に黒服を着し、講演中にも顔色赤く、眼濕ひ、額の靜脈一段の隆起を見受けました。五月二十七日

マルブルヒ 伊藤 猷典

## 彙

## 報

### 哲學茶話會

六月十日(日曜日)樂友會館階上にて西田教授講義終了を紀念して集會、晚餐を共にし田邊教授の、袂別の辭並に發聲にて乾杯す。夜氣未だ冷かにして、轉た寂しきものあり。西田教授懐舊の辭ありて會を閉づ。